



堤健児社長（左）と、堤美津子専務（右）。「ツツミの品格」を守り抜いてきた二人の笑顔には、とても温かな人柄がにじみ出ている。

応接室の前では、「こちらでスリッパをお脱ぎください」と促される。最初は驚かれることも。



「ここは本当に板金加工の会社だろうか？」これが、私が『ツツミ産業』に初めて訪問した際の感想でした。エントランスを入ると、床に整然と並んだ6足のスリッパが凛とした雰囲気をつくり、開いたエレベーターからは心地よいお香の香りが私を包み、エレベーターの中では綺麗に配置された木炭が侘・寂を演出しています。目指す3階に到着すると、女性社員から深々と頭を下げてのお出迎えを受け、応接室に入ろうとすると、「こちらでスリッパをお脱ぎください」と促されるのです。何だか由緒正しい茶会に招かれたような心地よい感動が芽生えたことを覚えていきます。

文化には忘れてはならない心がありますし、うちでは従業員教育としてそういった気持ちを大事にするように教えています」と、ほほ笑みながら話す美津子専務の姿が印象的でした。橋本台の金属工業団地にあり、試作板金加工で名前を知られているツツミ産業はこのような会社です。日本の板金加工業が軒並み厳しい経営状況にある昨今、ツツミ産業を今日まで成長させてきた原動力はどこにあるのか、私の興味は膨らむ一方でした。

### うちの会社は —— 発明から始まったんです

ツツミ産業は、1965年創業の社歴46年の会社です。遅れて入って来られた堤健児社長の口から、「うちの会社は発明から始まったんです」という言葉が飛び出したときに、さらに興味を惹かれました。「明治大学工学部に在学中、『洗米カップ』というのを発明したんです。当時は父が大阪に転動していたために、私たち兄弟で食事の支度をすることが多くなったんだけど、冬

エントランスに整然と並んだスリッパと、深々と頭を下げた女性社員のお出迎えに、おもてなしの心がうかがえる。迎えられる方も思わず深めのお辞儀になる。



21 Unique Companies  
in Sagami  
and Tama

# FILE 08

【ツツミ産業株式会社】

## 明日の豊かさを創る “ツツミの品格”

日本の家電メーカーに必要不可欠となった  
試作板金の強さの裏に、  
古き良き日本の大家族的発想があった

取材・文＝飯尾英樹

D A T A

会社名：ツツミ産業株式会社  
代表者：堤 健児  
所在地：神奈川県相模原市緑区橋本台 2-5-30  
TEL：042-771-0380  
URL：http://www.tsutsumi-s.co.jp

試作板金加工で知名度が高い、ツツミ産業株式会社の重厚感あふれる本社社屋の様子。



ツツミ産業株式会社の創業当時の写真。当時から社長の笑顔は、今と何ら変わらず、温かい印象を与えている。



れも登記がされていない架空の会社で、差し押さえができなかったようです。

「当時の私は無知だったんですね。結局、洗米カップの販売は断念することになりました。でも、このことがあって商売のイロハが学べたんだと思います」と、静かに語る健児社長の姿が印象的でした。

### 板金加工業への転身

ツツミ産業が板金加工業に大きく舵取りするきっかけとなったのは、ある工業団地で社長が見かけた1つの光景だったそうです。

「洗米カップをあきらめ途方に暮れ

ていたところ、ある日ふらりと立ち寄った工業団地に次なるヒントが転がっていました。工場加工を終えた製品部品を何気なく眺めていると、どの部品も丸い穴がたくさん開いていることに気づいたんです。これはいけるかもしれないと単純に思っただけです。

この社長の何気ない気づきをきっかけに、金属部品に穴を開ける仕事を専門としてやってみようと思いついたそうです。

しかしすぐに、現実の厳しさに直面することになります。

「穴開けは特別な技術が必要とするものではないため、いくら熱心に穴を開けてみてもほとんど利益なんて出ないんですね。そのため、曲げ加工など、加工品目を増やしていったんです。食べるために必死だったんです。加工品目を増やすことで利益は増えましたが、やっぱり2次下請け、3次下請けではダメだとそのとき初めて痛感しました。あのときはお客様から直接依頼を受けられる1次下請けになるためにはどうすればよいか、お客様にとってなくてはならない存在になるためにはどうすればよいか、といつも考えてい



社長の発明品の「洗米カップ」。この発明をもとにツツミ産業株式会社は産声を上げた。当時は、1個480円で販売していた。

### お客様のためのさらなる挑戦

しかし、盤石だと思った試作板金の世界でも環境の変化はあったようです。

最近の新製品開発はCAD（コンピュータによる設計支援ツール）で行われることが多くなったため、試作レスの時代に入ったと言われています。そのため、ツツミ産業の試作板金の受注数も少なくなってきたというようです。

「私たちは、加工が難しく実用化が進まなかった金属を含め、あらゆる金属の加工ができるようになることを目指しています。そうすることで、お客様の新商品の発想の幅を広げる手助けができないかと考えているんです」

ツツミ産業では東北大学大学院の協力を得て、曲げ加工をするときにヒビが入り、実用化が進まなかった、マグネシウム合金の新加工技術の開発に成功しています。

マグネシウム合金は、鉄の4分の1、アルミの3分の2という実用金属中で最も軽い金属であり、鉄やアルミより強度が高く、プラスチック

「私たちが、加工が難しく実用化が進まなかった金属を含め、あらゆる金属の加工ができるようになることを目指しています。そうすることで、お客様の新商品の発想の幅を広げる手助けができないかと考えているんです」

具体的には、熱排出のためのファンや電磁波カットのためのシールドケースが要らなくなるため、製品コストが安くなり、製品の軽量化・小型化ができるようになるのだそうです。

現在、ツツミ産業では放送用VTRカメラやパソコンに、マグネシウム合金を使用することを提案して

クに比べて電磁波シールド性や放熱性に優れているという注目すべき金属です。

この金属の精密板金加工ができるようになる、お客様にとって多くのメリットが生まれるのだと社長は語ります。

現在、ツツミ産業では放送用VTRカメラやパソコンに、マグネシウム合金を使用することを提案して

ましたね」

社長が見つけた答えは、新製品の試作品板金加工を専門とする会社になることでした。

「今後、家電製品などの量産はほとんど海外生産に移っていくでしょう？でも、新製品の研究開発は必ず日本で終わるんですからね。だから、新製品の研究開発で必ず必要になる試作品の需要は、なくなることはないだろうと思っただけです。試作品をやっている会社も少なかったです」

この発想こそが、現在のツツミ産業の繁栄を形づくった決定的な瞬間ではないでしょうか。



難加工材のマグネシウム合金を、放送用VTRカメラのフレームに使用した試作品。この技術で、高硬度で軽量のVTRカメラが実現できるようになった。

21 Unique Companies  
in Sagamihara  
and Tama  
**FILE 08**  
【ツツミ産業株式会社】

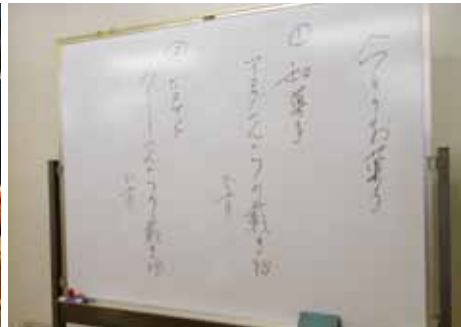


マグネシウム合金の新加工技術で、2011年の東京国際航空宇宙産業展に出席。出展ブースでは、ロボットアームへの使用可能性が広がった。



カラフルなチタン製デジタルカメラカバーの試作品。1個の簡易型のみで、マグネシウムやチタンを絞る加工技術は、2002年度の厚生労働大臣賞を受賞している。





試作板金の生産現場。みなさんの眼差しは職人そのもの。多くの家電メーカーの信頼を集める、ツツミ産業株式会社の試作品質は、ここで生み出されている。



「誰に対しても分け隔てなく平等に公平に」を貫く社内は、アットホームな空気が流れている。この日も、社員食堂のホワイトボードには、いただきますのお菓子のリストが書かれていた。

21 Unique Companies  
in Sagami-hara  
and Tama  
**FILE 08**  
【ツツミ産業株式会社】

「私はいつも、ツツミの品格を持ちなさい！って言うてるんですよ」と、柔らかな表情で美津子専務は語っていました。

ツツミ産業の今を支える原動力は、表面的にはどんな困難に直面しても決してあきらめることなく、

「**品格の力**」

「れるのだと信じています」  
厳しさと優しさを併せ持つ、社長と専務の従業員に対する接し方には、背後に深い愛情があるということを強く感じました。それはあたたかも57人の子どもの持つ大家族のようでした。

「発想力と創意工夫で乗りきってきた健児社長のDNAを受け継いだ従業員だと言えます。」

しかし、多様な個性を持ったツツミ産業の従業員がバラバラの方向に向かうのではなく、全社一丸となった活動ができてるのは、専務が行う躰や品格の教育のためであるような気がします。

きっと精神的な支柱があるからこそ同じ価値観を共有でき、57人の子どもの持つ大家族としての強い絆が育っているのではないのでしょうか。

きっと今日も「ツツミの品格を持ちなさい！」という美津子専務の声が響いていることでしょう。

“ツツミの品格”を持つみなさん。健児社長と美津子専務のもとに集まると、57人の子どもの持つ大家族のように映る。



いるようです。

「今回、縁があって東京ビッグサイトで開催された東京国際航空宇宙産業展で、このマグネシウム合金の熱塑性加工の新技术を紹介させてもらったんだけど、思わぬ引き合いがあったんです。重さが鉄の4分の1になるならサーボモーターの出力も単純に4分の1ですむようになるんですよ。それなら、ロボットアームに使用しないだろうかと言うんですよ。私たちが目指してきたことは間違いではなかったんだと実感しましたね。これからも他の難加工材の新加工技術を積極的に開発して、お客様に喜ばれる会社になりたいと思います」と、目をキラキラさせて語っている社長の姿が印象的でした。

「**ツツミ産業に集まる人材**」

ツツミ産業では、従業員の柔軟な発想力を生かしてお客様の要望をかなえ、お客様に喜ばれる会社になることを目指しています。

そのため、従業員にも多様な個性を求め、特徴的な採用試験を行っています。

「うちの会社の原動力は、柔軟な発

想力と創意工夫だと思っんです。だから、1年間ぐらいは他の業界で経験してきた、広い視野を持った人が欲しいと思っています。採用試験では、「自分が大切にしていること」というテーマの作文と、幼稚園のお受験テストを通して、『発想力』『センス』『個性』を見させてもらっています。

最終的には、ツツミ産業の考え方に合うかどうかが決め手になるんですけどね。試験は厳しいと思えます。でも、入社したら不思議と辞める人は少ないですね」と、美津子専務が笑顔で語ってくれました。

「**誰に対しても平等に公平に**」

「人は誰でも、必ず良いものを持っているものだと思っていますから、入社した人の良いところを引き出してあげられるように、しっかり教育してあげたいと常々思っています」と、美津子専務は語ります。

ツツミ産業の従業員教育は社長と専務が担当していますが、しっかりと役割分担があるようです。

お客様の要望を形にするために

必要な板金加工技術の教育は、健児社長が担当し、お客様に寄り添いお客様目線で発想するために必要な「一般常識」「躰」「品格」などからなる精神面の教育は、美津子専務が担当しています。

「うちに入ってきた人たちは、自分の個性を活かしつつ日本を背負って立つ人間になってほしいと願っています。だから、どんなにベテランの人でも、怠けていたり、ダメなところがあれば強く叱りますし、逆にどんなに小さなことでもがんばって結果を出した人は、必ず誉めるようにしています。このスタンスは、全従業員に対してえこひいきなく貫いている信念です」

誰に対しても平等に公平に接しあげたいという思いは、次のようなエピソードにも表れています。

「お客様にお菓子をいただいたら、ホワイトボードにいただいた人の名前を書いて、57名の従業員全員に行き渡るようにお菓子を57等分します。もし1人分がとて小々くなるようでしたら、同じお菓子を買ってきて皆に同じ分だけ渡るようにしています。誰かに大事にされた経験があるからこそ、人は相手に優しくな